

信教育で英語、書道の教員免許も取得した。

生来の負けじ魂に加え、書道部の顧問を務めながら研鑽を積むに連れて、自信を深めていった。三十三歳で白老から札幌へ。北海道工業高校で教鞭を取りながら、地方展としては全国最大規模を誇る北海道書道展を目標に据えた。

入選を重ね、会友から会員へと駆け上がる階段は、たやすく見えて違った。二年連続の落選。「うぬぼれていただけ」と悟った。「水」に苦しめられる以前に突き当たった、最初の壁だった。そして、突破のきっかけは、金文(きんぶん)とのめぐり会いだった。

金文は、約三千年前の周時代の青銅器に鑄込まれた簡素な文字。呪術的な意味合いが込められた甲骨文字を起源とする原始文字から発展した文字で、後世の楷書や行書体にならない豊かな表情を持つ。

石田は、この神秘的な造形美にひかれ、古代の人々の情念に魅入られるように筆を運んだ。青墨をふくませ、音楽のリズムに乗るようにして、逆にぶつけ、ひねって。「大孟鼎」。初めて取り組んだ金文作品が、第十八回展(一九七七年)の特選に輝いたのだ。



ここから四年連続特選の快挙が生まれ、新たな壁に直面することにもなった。

「塵」十年にも及んだ「水」との苦闘は、意外な形で決着した。水道水を使った「塵」が、なんと準大賞に輝き、それまで夢にまで見た「審査会員」推挙につながったのだ。

「塵」とは、俗世界を見つめ自分の心を高め清らかにすること。知らず知らずに選んでいた二文字が、「水」の意味を教えてくださいました。石田はようやく思い至った。

「あるとき先輩は、書を志す者として足りないものを『水』に託して示唆してくれたんだ」

■地域文化の根を育てる／世界の美に触れ淡墨に新境地

二度の壁を乗り越えることで、石田は漢字の魔力と魅力を実感した。二十年がかりでまとめた著書「文字学講座」には、そんな漢字の奥深さと書の限らない楽しさが綴られている。また、文字研究と時期を同じくして結成した書道グループ「尚志会」では、地道な活動を積み重ねながら気鋭の書家を育ててきた。現在住んでいる北広島市の文化連盟会長、街づくり委員など歴任し地域文化の振興にも力を注ぐ。平成十一(一九九九)年の全道書道展で文部大臣奨励賞を受賞。同十三(二〇〇一)年には、北広島市文化賞。

研究熱心に加えて、旺盛な行動力。「書道以外の芸術にも触れたらいい」という先輩のアドバイスに従った美術館・博物館巡りは、二十年以上続いている。国内約三百九十館を回り、ルーブル、エルミタージュ、ボストン美術館、大英博物館などにも足を運んだ。「書は線の芸術、余白の芸術。世界の名画が新しいインスピレーションを与えてくれた」という。

今、墨のじみ絵画的な印象の淡墨に、新境地を広げようとしている。にじんでも、よどまない。淡いけれども、求道者としての意思の明確な。そんな作品が、妻・信子の丹精込めた表装に飾られると、四辺の境界を超越したもう一つの美しいコスモス(宇宙)が誕生する。